都市近郊で酪農の6次化をさらに展開

◉榎本牧場

第30回・2005年受賞。牛の健康と牧場の環境に配慮し、
アイスクリームの加工・販売を通じた都市近郊酪農の可能性の追求

生乳販売から加工販売への経営転換

私の父が始めた酪農を、結婚と同時に昭和46年に引き継ぎました。場所は埼玉県の上尾市です。ところが新都市計画法が施行され市街化区域になったため、牛舎の建て替えが認められず困ってしまいました。

将来いつまでも酪農を続けていくためには公害問題等を起こさない場所で、また、牧草を栽培していた荒川河川敷になるべく近い場所をと考え、現在の場所に牛舎を新築しました。そこは自宅から約3kmほど離れた荒川沿いの4千m^{2}の土地です。周囲は河川区域で荒川が氾濫すると水没するため住宅は建てられず、また人家も少なく河川敷の牧草地までの距離も以前と比べ半分になるなど、酪農には理想的な場所です。

60頭の牛舎と2基のタワーサイロ、そしてロータリーパーラーが完成し移転したのは昭和49年の秋でした。私の弟も経営に参画し新天地での酪農がスタートしました。移転後、毎年少しずつ隣接地（河川区域）を買収し、現在の1万2千m^{2}ほどの広さになりました。あわせて規模拡大も図り弟夫婦と交代で休みを取るようにするなど、自分たちが理想とする経営に取り組んできました。

昭和63年にはもう1棟牛舎を新築し、数年後には130頭に総頭数も増えました。しかし、敷地面積からはこれ以上の増頭は不可能なので、今後どうするかという問題が出てきました。「何もしないでいても何も変わらない」。有料での消費者向けの乳搾り等の体験を始めたところ評判になり、3大新聞が次々と取り上げてくれました。

上尾の西の端の荒川沿いの牧場にたくさんの人が訪れるようになりました。その人々の「牛乳はないの？」「アイスクリームは？　チーズは？」といった要望や他県の先輩牧場の意見も参考にしながら、アイスクリームの製造販売をすることにしました。

アイスで収入が増えれば牧場の規模拡大をしなくていいのでは、との思いから始めた牛乳の加工でした。ところが「アイスが美味しい」と評判になり売上が年々増加し、パートさんを雇ったり、ハエが多く臭いとの意見から乳牛頭数を減らしたりなど、まったく予想外の展開となりました。生乳のままJAに販売をするよりも加工したほうが利益率が高いため次第に加工中心の経営に転換していきました。

それまで首都圏の酪農は公害問題等で大変だとの認識しかなかったのですが、加工販売を始めたことにより大消費地に近い優位性を認識することになりました。

消費者へのピーアールも意識した牛舎の改築

アイスクリームの販売を始めて6年が経った平成18年は牧場への来訪者も5万人以上、酪農部門の縮小にもかかわらずアイスクリームの売上により経営全体では右肩上がり

る。こんなナンセンスな森林管理は許されるべきではないのです。

今あるスギをすべて伐って広葉樹を植えるというのは、防災上、大変危険なことです。なぜなら、現存するスギの根が持っている土砂の崩壊防止機能を無視しているからです。スギを伐ってしまうと同時にスギの根は枯れ、細い根から順に腐っていきます。7～8年もすれば土砂を安定させる根はほとんど腐り、土砂の崩壊防止機能を失います。

広葉樹を植えても伐採前のスギ林と同じ程度の機能を果たすまでには20～30年がかかり、スギを伐採した後、広葉樹が大きくなるまでの20～30年間、山の土砂は非常に崩れやすく危険な状態にさらされるのです。その間に土砂崩壊があったら、誰がどんな責任を取るのでしょうか。これを勧めた関係者はだれも責任すら感じないことでしょう。

スギ伐採跡地にみる自然の摂理

スギの伐採跡地では、土に埋もれた草や木の種が一斉に芽吹き、多くの場合タラやカラスザンショウなどのトゲのある初期成長の速い広葉樹が発生します。これらの広葉樹は山に杭を打つように地中深く根がまっすぐ伸び、伐採跡地の土砂の崩壊防止に高い機能を発揮します。自然界は伐採跡地を安定させるために、その土地に最適の植生を自然発生させるのです。

この自然の摂理を理解せず、人間中心で自然に対し軽薄な知識しか持たない現代人は、人間の行為が自然の摂理よりも優れていると思い込み、スギの伐採跡地に広葉樹を植えたがります。伐採跡地にサクラ、モミジ、シイ、カシ、ナラ、ブナなどの広葉樹を植栽しても、その土地に最適の植生として自然発生する樹木の成長が速いため、植栽した広葉樹の成長に邪魔だと、自然発生したタラやカラスザンショウなどが持つ土砂の崩壊防止機能などを無視して、その土地の最適植生を下刈りし全て刈り取ってしまいます。

このことが土砂崩壊を発生させる大きな要因の一つであり、自然の植生が持つ土砂安定の機能をもっと重視すべきなのです。しかし、林学者と言われる人までがこの自然の摂理を理解せず広葉樹植栽を進めていることが多いのが現状です。

「広葉樹　育てる賢人　植えるバカ」

真に、地域の森林環境の保全を考えるのであれば、スギ林を皆伐するのではなく、現在のスギ林が持っている土砂崩壊防止等の機能を維持しながら徐々に広葉樹林に誘導すべきです。具体的には、幹の太いスギを残し現存本数の半分まで細いスギを間伐します。すると、必ずその山に最適な広葉樹が自然に発生します。その後は10年に1回ずつ、スギ林の本数が半減するように間伐します。こうすれば、山は安定した状態を維持しながら広葉樹林へと移行できるのです。

シイタケ原木の生産を目的にクヌギやナラなどを植栽するのは合理的な森林施業ですが、ただ広葉樹林を造りたいと「スギをゼロにしてイチから別のことを始める」という方法は、森林保全の考え方にはなじまないものです。実際、伐採跡地に植えた広葉樹が50年以上健全に育った例を私は1ヵ所しか見たことがありません。

広葉樹を植栽しても下刈りが終わった後に自然発生する広葉樹に、植栽した樹木は負けてしまうのです。皮肉なことに、下刈り後に自然発生した広葉樹が育ったおかげで「いい山になった」と言うのはよくあることであり、広葉樹は自然発生した木を育てればよいのです。

だから、私は言います。「広葉樹　育てる賢人　植えるバカ」。

の収入となり経営転換に自信が持てるようになりました。

そんな折り、5月の連休の忙しさが一息ついたとき妻が他界しました。アイスクリームの製造販売の中心だっただけに大変なものがありましたが、さりとて1日も休むわけにもいかず家族一丸となり何とか乗り切りました。

その頃から次第に牛舎の老朽化に伴う事故牛の発生が増え、牛舎の建て替えの検討を始めました。搾乳機についてはいろいろ検討した結果、ロボット搾乳機の導入を決めました。大勢の消費者を迎える牧場側としては場内をきれいにし、危険を防がなければならず、何よりもお客様に最先端の機械を見てもらい酪農のピーアールもできると考えてのことです。

その時までは個人牧場だったのですが、農事組合法人を設立し合わせて農水省の事業費の半額補助の「強い農業作り交付金」の申請もしました。また県からの指摘もあり糞尿処理施設もきちんと設備することとしました。

平成20年3月に、総事業費1億2千万円で650m^{2}58頭入りフリーストール牛舎が完成しました。160m^{2}の2階部分は地産地消のための消費者との交流施設としての研修室ももうけました。念願だったロボット搾乳機は、牛舎の正面の最も目につく場所に設置しました。

しかし、この搾乳機の見学を子どもたちが喜んでくれるだろうとの目論見は物の見事に外れました。子どもたちには機械の仕組みがわかりづらいらしく、関心を示しませんでした。一方、大人たちは搾乳機械の一連のうごきを飽きずにずっと眺めている人が多いのには驚かされました。

新商品ヨーグルトへの挑戦

この時の牛舎の新築にはもう一つの目的がありました。以前の牛舎より長さを縮め敷地の角に30坪ほどの土地を空けたのですが、それはアイスクリームの次の商品を販売する時のために工場用地をのこしておくためです。新牛舎の稼働が順調にいくようになった後に、次期商品を何にするかを考え始めました。当時人気だった生キャラメル、養鶏場と組んでのプリン、牛乳ジャム等々。チーズ作りのために宮城県に3泊4日の研修にも出かけました。

一つ一つの商品の試作や将来の可能性、利点欠点を探りました。そしてたどり着いたのがヨーグルトでした。その頃政権が変わり「農業の6次化」第一回目の募集がありました。大震災直後の締切りに合わせて計画を練り、受からなければもう一度と思いつつ申請したら通ってしまいました。当初の1年半ほどは人手がアイスの忙しさもあって手が付けられない状態だったので後に着工との計画も組み込んでおきました。平成25年晩秋からのヨーグルト工場の建設とアイスクリームおよびヨーグルトの売店の改築が始まり平成26年3月末に両施設共に完成しました。

そこでは従来のアイスクリームに加え、皆で味を考えた飲むヨーグルト2種類と食べるタイプ1種類も販売されております。100%牛乳から作ったヨーグルト。お客様からも美味しいとの評価をいただいており、今後の販売に期待しています。

誰でもが機械と技術を覚えれば製品を作ることはできます。しかし、売って代金を手にしなければ意味はありません。上手くいっている所をまねるだけでなく、製造者も工夫が必要ではないでしょうか。

TPPの締結も心配ですが、どんな経済状況になっても残っていくためには何をすれば良いのか、これからも考え続けていこうと思っています。

報告・榎本 求（榎本牧場代表）